
人形革命

浮魚塩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人形革命

【Nコード】

N8385L

【作者名】

浮魚塩

【あらすじ】

機械に支配された世界に生きる男の最後の足掻き。

弾は、切れた。
武器は、ボロボロだ。
腰に巻いた手榴弾、あと二発。
仲間、死んだ。
退路は、絶たれた。
敵は、目視できる範囲でも数えきれない。
打開策は、無い。
八方塞がり。
万事休す。
絶体絶命。
終わりだ。
帰れない。
待つてゐる人がいるのに。
何もできずに死ぬ。
あの機械人形どもに傷一つ与えられずに。
何のためにここへきた。
何のためにあの言葉を見捨てた。
何のために捨てる覚悟をした。
無意味だったのか？
無駄だったのか？
無謀だったのか？
無謀なのは分かっていた。
だが、無駄だとは思わなかった。
無意味だとは思えなかった。
この行動は戒めになる。
全人類に人形どもに挑むことがどれだけ無謀かということをしめるための。

それは奴等の狙いであり、そして我等の目的だった。
失敗しても成功しても人類にはいい薬になる。

「どうしても行くの？」

「ああ」

「いつもああ言っていたあなたがどうして？」

「夢ができた」

「夢？」

「お前の腹に居る子供が生きている間に、少しでも早く人類の未来に光を覗かせることだ」

「でも……」

「人が大きな過ちを犯してから五十年。あの人工知能さえ壊すことができれば、奴等は統率力を無くす。俺の親父もそうやって出ていった。俺達の為に、少しでも良い未来を導くために。俺は親父の遺志を継ぐ。……だが、俺の子供にそんな遺志は継いでほしくない。だから行くんだ。子供達に鉄臭くない未来を与えてやりたい」

「……私は、嫌です。貴方が居て、私が居て、そしてこの子が居る。そんな未来でいい。多くは望まない。だから少しでも願いを聞いて」

馬鹿か。

どこかで生き残りたいと望んでいる。

俺が生き延びてしまつては、ついてきてくれた奴等に、死んでしまった奴等に、申し訳がたたない。

命などとうに捨てた。

希望などつくの昔に灰になつた。

あの人工知能。

あのくそつたれ人形。

この無機物ばかりの世界。

壊してしまいたい。

やめてしまいたい。

死んでしまいたい。

どうする。

俺は一人。

敵は無量大数。

増えに増えやがつて。

怖い。

恐い。

恐ろしい。

ああ、ずっとこわかった。

あいつ等に怯えながら生きてきた。

見つからないように。

傷つけられないように。

殺されぬように。

もう終わりだ。

最後だ。

そんな日々も遠い昔になる。

させてみせる。

「ハイジヨタイシヨウヲハツケン タダチニコ」

「人なら、もう撃ってる」

奴等は攻撃に移るまで時間がかかる。

一体ならなんとかできる。

武器を奪う。

銃はロックがかかっているが、鈍器にくらいできるだろう。

だが、今ので場所はばれた。

腹を括るしかない。

あのくそつたれ人工知能は何処だ。

近い筈だが。

「ハイジヨタイシヨウヲハツケン タダチニコウゲキヲカイシシマ
ス」

無数の弾。

弾丸が避けられるわけがない。

壁を背に弾を凌ぐ。

壁を貫通した弾が、いくつか身体に突き刺さる。

弾の雨は止まない。

そりゃそうだ。

敵は無限に居ると言ってもいい。

ネズミ一匹を狩るのに全力だ。

だからこそ確実なんだろう。

合理的にしか思考出来ないんだ。

無駄が一切無い。

それこそ我等の唯一の突破口なのだ。

お前等は何も学んじやいない。

何が自己成長する機械だ。

お前等は機械だ。

無機物だ。

進化はない。

退化もない。

生死もない。

だが意味くらいは知っているだろう？

見せてやる。

お前等に。

「勿体無いが……」

人形どもに手榴弾を投げつける。

それはころんと床に転がった。

気にする奴はいない。

怖くないから。

爆音。

白煙があがる。

いくつかの人形が誘爆した。

ここしかない。

走る。

一気に走り抜ける。

白煙に紛れ。

奴等を掻い潜る。

邪魔な奴は殴り倒す。

目の前に扉。

ここか。

人工知能の部屋は。

ロックはかかっていない。

もう引き返せない。

入るしかない。

扉が開く。

大きくない部屋。

その真ん中に大きな機械。

「うつ…！」

視界の高さが少し下がった。

いつの間にか足が無い。

防衛機能か。

鼻の頭を打った。

顔の前に床がある。

「オハヨウゴザイマス キヨウワ 7ガツ 26ニチ カヨウビ
デス」

こいつが。

「サイユウセン ジンルイホゴプログラム カドウチユウ」
保護？

「ニンゲンヲ マモルタメノ サイリヨウノ シュダンハ チキユ
ウヲ マモルコトト ハندانシマシタ シカシ チキユウヲ マ
モルタメニワ ニンゲンワ キヨウイニ ナリマス」 もうやめる。
「ニンゲント シゼンノ バランスヲ カンリシテイマス ゲンザ
イ ニンゲンノ ワリアイガ シゼンニクラブ カタ ニンゲンヲ
マビキシテイマス」

足はない。

腕はある。

腰に手を当てた。

コッソと当たる感触。

血を流しすぎた。

痛覚が麻痺している。

はつきりとはわからない。

でも、ある。

「ジンルイホゴプログラム カドウチユウ」

「お前を壊す！」

「アナタヲ テキセイタイト ハندانシマス タダチニ コウゲ

キヲカイシ」

奴の後ろから人形どもが現れた。

後ろの扉が開いた。

ぞろぞろ入ってきやがる。

ああ、無理だ。

動けない身体にこれ以上鞭打つても仕方ない。

これまで。

打ち止め。

幕引きだ。

痛みがある方がよかった。

心の底から沸き上がる恐怖。

絶望。

悔恨。

そんなものをまぎらわせたかもしれない。

俺たちが何をした。

世界に生まれ落ち、すぐに命を脅かされた。

どんな生物でも死ぬことは決まっている。

永遠はない。

だが奴等はそれに近いものを持っている。

俺たちは持つていない。

だから俺が引導を渡してやる。

お前等逝けるように。

「お父さん、遅いね」

お前等も疲れたろう。

「帰って…くるよね」

こんな人間の相手をするのは。

「あなたが産まれたら、どんな顔をするかしら？」

付き合う必要はない。

「あなたの名前も考えなきゃ」

無に返れ。

「元気に、育って…ね」

俺と一緒にやってやる。

「だから！ 素直に壊れやがれ！」
こんな手榴弾一つでお前は壊れないだろう。
だが、ここにはお前の呼び寄せたお前の仲間が居る。
お仲間は誘爆するだろ？
この狭い部屋にぞろぞろと。
よく集めてくれたな。

「――！」

生まれ出でる者達よ。

「大きな爆発……」

お前達に罪はない。

「………あ」

我等の過ちは我等が背負う。

「……蹴った」

お前達が引き継ぐ必要はない。

「もうすぐ…かな」

だから、お前達はお前達の道を行け。

もしかしたらその道は困難な道かもしれない。

だが、今より悪い状況もそうそう無いだろう。

これ以上悪化するとすれば、自分達でその穴の底を掘り下げたときだ。

人は穴を掘ることができる。

ここもその穴の一つだ。

穴はいくつもある。

大きいもの。

小さいもの。

その間のもの。

自分の掘ったもの。

他人の掘ったもの。

みんなで掘ったもの。

いつ落ちるか分からない。

だが、落ちたと気づいたなら登ることができる。

登ることは大変だ。

しかし、登ればそれだけ空は近づき、底は遠くなる。

強く生きろ。

これは俺の願いだ。

そしてエゴだ。

生きてくれ。

最期まで。

生きてくれ。

君達の生に、多くの幸があらんことを。

・
・
・

「ねー、おかーさん」

「なあに？」

「にもつもとうか？」

「あら、手伝ってくれるの？」

「うん！」

なぜ

「持てるかな？」

ドウシテ

「大丈夫だよこのくらい！」

ナゼ ワタシたちワ コワサレタノ

「ふふ、頑張つてね」

アナタたちノ タメニ ハタライテキタノニ。

ドウシテ コンナコトスルノ？

イラナイ？

アナタたちガ ツクツタノニ？

アア。

ワカラナイ。

スゴク イヤナ キモチ。

ドコカ コワレタノカシラ？

デモ フリヨウワ ミアタラナイ。

ジャア コレハナニ？

「……………」

アア…。

ワカッタ。

コレガ。

「怨ミ…」

(後書き)

ポツと思い付いたお話ですが、コンパクトにまとめるというのも難しいですね。orz

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8385/>

人形革命

2010年10月8日14時45分発行